

●「森」は最高の学び空間

「森林空間を活用した小学校をつくらないだろうか？」そんな思いから、森を舞台に授業をすると学習指導要領をどれだけ網羅できるかを小学校教員らと共に調べてみた。すると驚いたことに殆どの項目をカバーできるという事実が明らかになった。

例えば「遊びの森づくり」を次の流れでやるとしよう。①地域の森を地図で探す②地域の人に森について聴く③森までの距離や費用を計算する④森を調査する⑤森で遊ぶ⑥森の使い方を話し合う⑦必要な資材を計算し調達する⑧森の遊び場をつくる⑨森を管理する⑩森を公開する⑪森を表現する⑫ふりかえり⑬記録に残す……etc. これらの活動には、国語、算数、理科、社会をはじめ小学校全教科の学びを容易に盛り込める。これなら子どもたちは、「遊びの森づくり」という目標に向け非常に高いモチベーションで知識や技術をリアルに身につけていける。森は理想的な「学びの場」なのだ。

「有機教育（オーガニック・エデュケーション）」をはじめよう！
「森」「暮らし」「ひと」の中にホンモノの学びがある

萩原ナバ 裕作



●「学び」は「暮らし」の中にある

大学入試問題を見て「生きていく上で本当に必要な知識なのだろうか」と思う人も多はずだ。「いつか必要になるから学ぶ」カリキュラム先行型教育には問題がある。そのことは日本の大学生たちを見れば明らかだ。彼らの中で「学び」と「暮らし」は結びついていない。受け身な学びのためか、問題に気づき、自分で考え、行動する力も奪われている。膨大な時間を費やして一体何を学んできたのだろうか？

同じ悩みを抱えていたカナダの医大では、知識を先に教えることをやめ、まず現場で患者と向き合い、課題や問題を学生自らが発見し、そこからは

じめて必要な知識や技術を身につける「教えない教育」システムに変更した。その結果、毎年優秀な医師を輩出するようになったという。カリキュラム先行型の教育は、大人数を効率よく教えるために創られたシステムに過ぎない。リアルな現場で、疑問や課題をきっかけに自ら学びを深めていくことが何よりも重要だ。

リアルな現場といえば、私の担当学生が持続可能な暮らしを伝えるためにニワトリを飼い始めた。彼女はニワトリを飼う過程で出てくる課題を解決するために知識や技術を習得し、それが彼女の血となり肉となっている。衣・食・住を自らの手で創る暮らしをはじめてみると、そこに様々な知識や技術が隠されていることに気づく。本当に大切な学びは「暮らし」の中にある。

●もう一度森で人をチャンプスル

「森のようちえん」を見ていると、子どもたちの自ら学び成長していく力に感心させられる。森は、子どもたちの

「生きる力」を発揮しやすい空間なのかもしれない。森で成長しているのは子どもだけではない。大人も子どもたちと向き合うことで成長している。森では、子どもも大人も平等だ。多様な人が混ざり、学び合い、成長し合えるのだ。

我々の先祖は、サルの群れのように、森の中で異年齢が混ざりあった集団で暮らしていた。それがいつしか効率化を理由に年齢ごとに分けられ、部屋や建物で分断された状態で学び、仕事をしようになった。生きものとしては不自然な状態となり様々な弊害をもたらしている。もう一度、森で人を混ぜる必要がある。

●森と暮らしの自由ながっこう

2015年、既存の学校制度では通用しない時代が来ていることに気づいた文部科学省が教育大改革を始めた。ならばその一歩先を行って、県土の8割を占める豊かな「森」を舞台に、「暮らし」や「人」など有機的なものや手法に基軸を置いた自由な教育システム「有機教育（オーガニック・エデュケーション）」をはじめようではないか。日本の新たな教育モデルが、ここ岐阜県の森から生まれるかもしれない。

